

## 二宮町立二宮中学校

研究テーマ：9年間を見通した共通性と一貫性のある指導・支援を通した、  
「学びに向かう力」の醸成と資質・能力を育む指導のあり方(3年次)

### 1 実践の目的

二宮町では、令和5年4月より町内すべての学校が1つの施設分離型小中一貫教育校『にのみや学園』となった。学園の開校に向けて、にのみや学園の教職員全員の願いや想いを紡ぎ、教育目標を次の通り定めた。

『認め合い 高め合う 二宮の子』

この教育目標を実現するために、子ども同士の学び合いや話し合いを中心とした授業づくりに学園全体で共通性と一貫性をもって取り組んでいる。学級づくりの基盤や学習の進め方を揃えることで、子どもたちが安心して学んだり、進級したりできるようにするとともに、9年間を見通して子どもたちに必要な資質・能力の育成を図ることができると考える。

子どもたちに育みたい資質・能力を学園内で共通理解を図り、授業づくりを進めることを大事にしている。

二宮町で育みたい汎用的な資質・能力		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
①主体的に継続して勉強する	①必要な情報を集めて分析する	①多様な価値感の仲間を増やす
②多様な学びで知識を吸収する	②状況に応じて適切に判断する	②互いの違いを認め高め合う
③知識を応用して上手に使う	③論理的で柔軟に思考する	③誇めずに自分の夢をかなえる
	④自分の考えを正しく伝える	

授業づくりでは、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」を意識し、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力・人間性を一体的に育てて

いくための授業改善を図ることを意識している。

特に、3年次となる令和5年度においては、学びに向かう力を高めていくために、以下の内容も研究の視点に加えて取り組んだ。

- ・習得の授業における子どもの主体性
- ・日常生活や学校生活との関連付け
- ・学習活動や単元全体の目的意識の共有

### 2 実践の内容

#### (1) 研究体制

今年度も引き続き、二宮町5校統一の講師として教育力向上アドバイザー吉新一之氏(元川崎市立川崎小学校長)を迎え、各校で行われる校内授業研究会に事前検討会を含めて指導・助言を仰いでいる。

また、教科の関連が比較的近い「国語・社会・体育」、「英語・音楽・美術」、「理科・数学・技術・家庭科」で教科グループを組み、年間を通じて授業検討を行った。校内授業研究会ではその教科グループの授業を軸として互いに参観した。

#### (2) 研究授業、研究協議の様子

校内授業研究会を1学期に2年生4クラス、2学期前半に3年生3クラス、2学期後半に1年生2クラスで実施した。各教科の特性に合わせ「個別最適な習得の授業」を行うのか、「協働的な知識活用の授業」を行うのかを選択して構成した授業を、教科グループごとに参観した後、研究協議の時間をもった。研究協議のテーマは、主題を変えず、

各学年や実施する教科の実態に応じて段階的にサブテーマを設定した。

1学期のサブテーマは「誰一人取り残されない習得の授業のための“汎用的な方法”を見つける」、2学期前半のサブテーマは「教科グループごとの授業の視点を共有し、研究の方向性を考える」、2学期後半のサブテーマは「今年度の研究の成果と課題をまとめ、来年度の学校研究と明日からの授業へ繋げる」である。

授業の様子として、技術科では「個別最適な習得の授業」として、リトルティーチャーを立てた自然な教え合いの中で行う“はんだ付け”習得の授業を行い、1年生の国語では、竹取物語の教訓は何かというテーマで「協働的な知識活用の授業」を行った。どちらの授業でも教員が生徒の活動を見守ることで、生徒たちが主体的・対話的に授業課題に取り組むことができた。

研究協議では、テーマに沿った話し合いに全員が積極的に参加する様子が見られた。

### 3 実践の成果

教科の垣根を越えて自身に無かった視点を得ることは非常に効果的であることがわかった。また、関連性のある教科でグループを組むことでイメージがしやすくなり、『○○という教科だからできる。』といったように自身の授業と切り離して考えることが少なくなり、校内研究が有意義なものになったと考えられる。



第2回の研究協議 英・音・美グループのまとめ

また、問題解決学習を行う上で、子どもたちにとって、どの課題が取り組みやすく、積極的に取り組むことができるのか、教員の中で、いくつか答えを得る機会となったと考えられる。



1年生 国語の授業(竹取物語の教訓は何か)の板書

### 4 今後の展開

教科グループごとにいくつか課題が出た。以下の表にまとめる。

国 社 体	・小グループでの授業を増やし、教え合いや話し合いのしやすい環境を作りたいが、きちんと身につけているか、話し合いで出た意見を知識としてどのように収束させていけばよいかなどの不安がある。
数 理 技 家	・リトルティーチャーを多く立て、SOS を出しやすいようにしたいが、なお質問できない生徒をどう救うか。 ・技能を中心とした教科のため、協働的な知識活用の授業を行うことが困難である。
英 音 美	・意見の出しやすい雰囲気づくりを学級経営の段階で行っていく必要がある。 ・積極的に出された意見も発表することだけが目的にならないように内容を精査していく必要がある。

以上の課題の解決策を検討していくとともに、今回設定した教科グループの垣根を超えた汎用的な教材や手立てを追究することができれば、すべての教科で『資質・能力を育成するための主体的・対話的で深い学び』を実現できると考える。グループの組み方や、目標設定についてさらなる検討を行っていきたい。